

現代青年の対人関係

著者	岡田 努
雑誌名	思春期学 = ADOLESCENTOLOGY
巻	21
号	1
ページ	16-20
発行年	2003-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/7556

《特集Ⅰ》第21回日本思春期学会学術集会

シンポジウム2「思春期における問題行動」

現代青年の対人関係

金沢大学文学部

岡 田 努

第21回日本思春期学会学術集会での講演にもとづいて、現代の若者の心理学からみた対人関係の特徴について述べてみたい。

1 青年期について

発達心理学において、「思春期」は主に第二次性徴に伴う身体的な変化の時期という意味で用いられ、これに対して心理的な側面に焦点を当てる場合には「青年期」といういい方がされることが多い。青年期のはじまりは第二次性徴とほぼ一致すると考えられるが、その終わりについては、個々人のおかれた社会的な状況や性格傾向などによる個人差が大きく、定義づけは困難である。

2 青年期の対人関係：現象面あるいは一般的な言説から

青年期は古くより「疾風怒濤」の時期と比喻され（Hall, 1905）、はげしい情緒的体験と不安や葛藤の中で、親密で内面を開示するような友人関係をもとうとすることを特徴とし、そうした関係を通して青年は自分自身の新しい自分像（アイデンティティ）を獲得し、成人へと成長していくと考えられてきた（西平, 1973など）。松井（1990）によれば、青年期の友人関係には、緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する「安定化機能」、社会的関係を円滑にこなすためのスキルを学習する機会となる「社会的スキルの学習機能」、友人が自分の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」などの機能をもつとされている。

しかし、社会情勢の変化などによって、現代の青年には、これまでとは違った対人関係上の特徴

がみられるという指摘がなされるようになってきた。それらの特徴を総合すると、以下のようにまとめることができよう。

- (1) 他者から「暗い」「面白くない人間」と評価され仲間はすれにされることを恐れ、実際以上に明るく振舞い、深刻な話題を避ける（千石, 1991）といった「群れ」傾向。
- (2) 対人関係上で生じる互いの葛藤を避けるために、標準的な行動様式に固執したり（マニュアル人間）（犬田・藤竹, 1989）、互いに傷付け合うことを強く恐れ、相手の内面に踏み込まないよう気を付けながら滑らかで暖かい関係を保っていこうとする傾向（小谷, 1998；大平, 1995など）。
- (3) 物質的で幻想的な世界にだけ自分の適応できる世界をもち本来情緒的コミットが可能な領域においても、防衛的に無機的なかかわりをするような（中島, 1991；岡田, 1992）「おたく」と呼ばれる青年群や、「ひきこもり」などに代表されるような対人関係から退却する青年のように、対人関係場面そのものから退却し孤立してしまう傾向などである。

一方、精神科や大学の学生相談などの場面においては、対人恐怖症の新しい型として「ふれ合い恐怖」と呼ばれる症状群がここ数十年の間に紹介されるようになってきた（山田・安東・宮川・奥田, 1987；山田, 1989など）。すなわち、従来の対人恐怖症が、対人関係が生起すること自体に恐怖を感じるのに対して、「ふれ合い恐怖」では、形式的表面的関係は明るく上手にこなせるにもかかわらず、雑談や会食など対人関係が深まる場面に恐怖を感じるという特徴を示す。すなわち、従来

の対人恐怖が「出会い」場面を恐れるのに対して「ふれ合い」が生じる場面で発症することから「ふれ合い恐怖」と名付けられている。表面的には明るく振る舞いながらも、関係の深まりを避けるという点では、先に述べた現代の若者の特徴と共通するものがある。

3 社会的背景

こうした青年の対人関係の変遷には図1に示したような時代的な背景が指摘されている（大平，1995；栗原，1996；小谷，1998など）。

すなわち1970年代の青年にとっては、世界の若者や弱者との連帯という意味での「やさしさ」が対人関係や自らを規定するキーワードになっていた。そうした連帯感と自己の有能感を確認し、自

分の善性を確認することが、青年自身のアイデンティティの根拠となっていた。しかし1980年代に入ると「やさしさ」は自他を傷つけないために相手の内面に踏み込まないという矮小化した意味合いに変容してしまった。互いが傷付くリスクを犯してでも連帯感を求め、それによってアイデンティティを確立することよりも、傷付ける心配のない小集団との対人関係に閉じこもり（原子化）、それ以外との関係においては、希薄で共感を伴わない関係のままでいようとするようになった。さらに1990年代以降は他者への無関心化がさらに進み、他者はただの風景でしかなく、社会システムに身を委ねて浮遊するだけの生き方が中心となってきた。他者の内面は基本的に推し量れないものであり、そのような理解不可能な他者に対しては、親

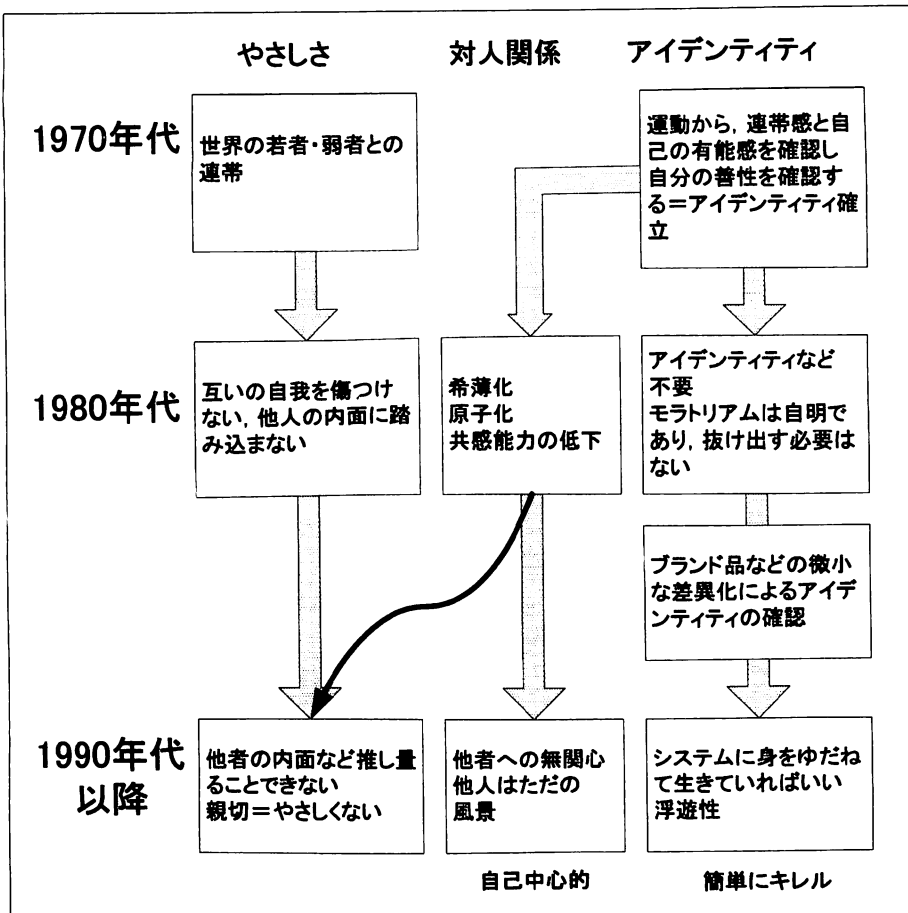


図1 現代青年の特質とその時代的変遷

大平（1995）；栗原（1996）；小谷（1998）などの記述を基に作図

切になどしない方が「やさしい」(推察不可能な他者に自分の親切心を押しつけない)というように、「やさしさ」も寛容してきたという。

4 実証的研究

しかし、これらの指摘はもっぱら、社会学や臨床現場における経験的、直観的な指摘が中心であり、現代青年の対人関係についての心理学的実証研究は多くはない。そうした中で、現代青年の対人関係の病理的特徴である「ふれ合い恐怖」の構造について実証的な検討を行った岡田(2002)の研究を紹介したい。

この研究では以下の調査項目について、質問紙調査を行った。

(1) 友人関係尺度 岡田(1995)によって作成された現代青年に特徴的な友人関係に関する尺度(15項目)。本研究では因子の構造について再検討を行い、以下のような下位分類がなされた。

I「お互いのプライバシーには入らない」「相手に甘えすぎない」など「不介入」をあらわす項目群(下位尺度)

II「楽しい雰囲気になるよう気をつかう」「互いに傷付けないよう気をつかう」など「気づかい」をあらわす項目群(下位尺度)

III「冗談をいって相手を笑わせる」「みんなで一緒にいることが多い」など「群れ」をあらわす項目群(下位尺度)

(2) ふれ合い恐怖尺度 本研究では一般健常青年におけるふれ合い恐怖的傾向(ふれ合い恐怖的心性)を検討する目的で本尺度を作成し用いた。因子構造を検討した結果以下の2つの下位尺度に分類された。

I「友だちと一緒に食事をするのは好きでない」「できることなら人とあまりかかわりになりたくない」など「対人退却」をあらわす下位尺度。

II「人といっても話題がなくて困ることが多い」「人という場面で、言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる」など「関係調整不全」をあらわす下位尺度から成る。

(3) 対人関係尺度 永井(1987, 1994)が作成した、一般健常者における対人恐怖的な傾向(対人恐怖的心性)を測る目的で作成されたもの。本研

究では従来型の対人恐怖的な傾向の程度を測るために用いた。以下の3つの下位尺度をもつ。

I 対人状況における行動・態度の諸特徴：(集団にとけ込めない、集団の中で気恥ずかしい思いをするなど行動面での対人恐怖の状態の度合い)

II 関係的自己意識：自分が他者に悪い印象を与えたり、他者に自分の弱点が知られることを恐れるなど対人場面での関係のあり方の困難の程度

III 内省的自己意識：気もちの不安定さ・劣等感や集中力の低さなど自分自身に向けられた不安定な意識の程度

いずれも「1：まったく当てはまらない～6：とても当てはまる」の6段階で回答。

(4) 不安場面項目 対人不安を感じる各場面について「1：とても不安である～6：とても安心できる」の6段階で回答。安心感が高いほど得点が高くなるように集計された。場面は以下の3種類に分類された。

I 公的場面・年長者の前：「サークルや部活でOBとまじめな話しをする時」「サークルや部活でOBと雑談する時」など。

II 心情的に近い他者との場面：「同じ学科やクラスの学生たちと一緒に食事をする時」「同じ学科やクラスの学生たちと雑談する時」など。

III 心情的に遠い他者との場面：「特別に親しいほどでもない友だち(同性)と、一緒に食事をする時」「特別に親しいほどでもない友だち(同性)と、勉強の話しをする時」など。

調査対象は新潟県内及び首都圏周辺の4年制大学学生1～4年生524人(男子289人 女子235人)平均年齢20.0歳(18～29歳)である。

調査の結果、以下のような結果がみいだされ考察された。

(1) 従来型の対人恐怖的心性との関係 対人関係尺度とふれ合い恐怖尺度を一括して、因子分析という統計手法により、回答パターンから項目を集約したところ、ふれ合い恐怖尺度のうち特に「対人退却」は対人関係尺度とは別のまとまり(因子)を示し、ふれ合い恐怖が従来型の対人恐怖と区別される内的状態であることが示された。

(2) 次にふれ合い恐怖傾向や対人恐怖傾向から回答者を分類するために、ふれ合い恐怖尺度および

対人関係尺度の各項目得点を変量としたクラスター分析（項目間の相関係数にもとづくグループ間平均連結法）という統計手法を用いた。その結果、以下の4類型がみいだされた。

① ふれ合い恐怖尺度の「対人退却」得点のみ高い「ふれ合い恐怖」群（男110人 女88人）

② 対人関係尺度の「関係の自己意識」得点のみ高い群（男38人 女21人）

③ すべての得点が平均以下で、不安感が全般に低い群（男16人 女10人）

④ ふれ合い恐怖尺度の「対人退却」以外の得点が高く、従来型の対人恐怖的心性を示すと考えられる群（男106人 女107人）

(3) ふれ合い恐怖的な傾向がどのような場面で発生しやすいかを調べるため、上で得られた各群での不安場面項目の得点について検討した。その結果、公的場面・年長者場面では、「①ふれ合い恐怖群」で安心感が高く「④従来型対人恐怖群」で低い傾向がみられた。心情的に近い他者場面では、「①ふれ合い恐怖群」で安心感が低く、「④従来型対人恐怖群」で高い傾向がみられた。こうした傾向は、会食や雑談など「ふれ合い恐怖」の中核的症状が発生しやすいとされてきた場面に関する項目で特に顕著にみられた。よって、「①ふれ合い恐怖群」では、心情的に近い他者との場面で「会食恐怖」「雑談恐怖」を感じやすいという臨床的な知見は、一般の青年においてもみられることが実証的に明らかとなった。また、心情的に遠い他者場面では、「①ふれ合い恐怖群」で安心感が高い傾向がみられ、情緒的な関係を伴わない形式的表面的関係には困難を感じないというふれ合い恐怖の特徴が実証的に示された。

(4) これらの青年が友人関係においてどのような特徴を示すかを調べるため、各群の友人関係尺度の得点について検討した。その結果、「①ふれ合い恐怖群」は「不介入」得点のみが平均以上の得点を取っていた。このことから、ふれ合い恐怖を示す群は、「表面的な友人関係を円滑にこなしている」とは必ずしもいえず、友人関係そのものから退却し、相手との親密なかかわり避ける傾向がみいだされた。一方、「④従来型対人恐怖群」は、「気づかい」得点の高さが顕著にみられ、対

人関係の維持に気をつかいながら、その関係に困難を感じており、山下（1970）が指摘する「親しさへの熱望」「たえず相手の気持ちを考える」など対人恐怖症患者の特徴と共通した傾向がみいだされた。

以上のことから、現代の青年の特徴として、ふれ合い恐怖的心性をもち、親密な友人関係から退却する傾向をもつ者が一定の割合でみいだされることが明らかとなった。その一方で、従来型の対人恐怖的心性を示す者、あるいは、不安感が低い青年群などもみいだされていた。従来の青年像とさほど変わらない青年群は他の研究（岡田, 1993; 1995など）においても一貫してみいだされており、必ずしも大半の青年が「現代青年の特徴」とされる行動傾向を示す訳ではないことには注意を要する。

引用文献

- 1) Hall, G. S. 1904 Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education. Volume 2. New York: D. Appleton and Company.
- 2) 犬田 充・藤竹 暁 1989 対談 標準を追う孤独なナルシストたち 現代のエスプリ265 Pp14-76.
- 3) 栗原 彬 1996 やさしさの存在証明—若者と制度のインターフェース—増補新版 新曜社.
- 4) 小谷 敏 1998 若者達の変貌: 世代をめぐる社会学的物語 世界思想社.
- 5) 松井 豊 1990 友人関係の機能「青年期における友人関係」(斎藤耕二・菊池章夫編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283-296).
- 6) 中島 梓 1991 コミュニケーション不全症候群 筑摩書房.
- 7) 永井 徹 1987 対人恐怖的心性に関する心理学的研究. 東京都立大学人文科学研究科博士論文.
- 8) 永井 徹 1994 対人恐怖の心理: 対人関係の悩みの分析. サイエンス社.
- 9) 西平直喜 1973 青年心理学 塚田毅(シリーズ編) 現代心理学叢書7 共立出版.
- 10) 岡田 努 1992 コンピュータにおけるコミュニケーション 心理臨床, 5, 95-99. 星和書店.
- 11) 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170

- 12) 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 13) 岡田 努 2002 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 14) 大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店.
- 15) 千石 保 1991 「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち—サイマル出版会.
- 16) 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 1987 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報): ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23, 206-215.
- 17) 山田和夫 1989 境界例の周辺: サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法, 15, 350-360.
- 18) 山下 格 1970 対人恐怖について 精神医学, 12, 365-374.